百人の陽気な女房たち

1955
作品ナンバー0002

文部省選定　厚生省推薦　1956年教育映画祭最高賞　ＮＨＫ優秀作品賞　朝日新聞社賞　第４回全日本ＰＲ映画コンクール厚生大臣賞　産経ＰＲ映画賞

都会の片隅にみられる裏町で、近所の子供が疫痢になった。消毒にきた保健所の人が、空き地のゴミの山にハエが群がり、溜まり水にボーフラが踊り、ふたのないゴミ箱からウジが這い出ている有り様を指摘して、こんなところが伝染病のもとになると教える。きれい好きなおばさんは、なんとかしてこの町をハエも蚊もいないところにしたいと思う。まず目をつけたのはハエの多い魚屋だが、言葉の行き違いから魚屋を怒らせ、次に隣近所の消毒をして清掃屋と間違われたり、市役所に頼むと予算がないと断られたり……。

ところがそんな時、子供が川に落ちて行方不明になるという事件が起きた。遊び場のない子供は、いくら止めてもこの川で遊ぶ。おばさんは、決心をした。ゴミの山の空き地をきれいにして子供たちの遊び場を作ろう、遊び場を作れば隣近所の人たちもゴミを捨てないだろうと。そのうちに子供たちが、そして地域のお母さんたちも仲間に入った。ゴミの山が低くなるとハエも目にみえて少なくなった。空き地がきれいになって子供たちの遊び場に変わると、ハエはいなくなった。こうして人々の衛生に対する関心も高まってきた。お店で空き箱が出れば、ゴミ箱にと寄付してくれたり、ゴミ捨て場になっていた橋のたもとには、婦人会の手で花壇が作られた。おやじさんたちも休みには汲み取り口をセメントで固めたり、二重ぶたが流行になったりした。裏町は見違えるほどきれいになった。

町中で陳情した甲斐があって役所もついに下水の改修を始め、舟を出して川の清掃も始めた。婦人会で決めた月３回の清掃日には、鐘を合図にお母さんたちがいっせいに町に出た。これからは夏にはハエ叩きも蚊帳もいらない明るい住みよい町になるだろう。

劇
35ミリ
白黒／30分

■ 企画
全国地域婦人団体連絡協議会
■ 協賛
中外製薬株式会社

スタッフ
■ 製作
村山英治
■ 脚本・演出
青山通春
■ 撮影
牛山邦一
■ 照明
田畑正一
■ 音楽
渋谷　修
■ 美術
長野正親
■ 録音
金谷常二郎
■ 演出助手
田中　徹
■ 撮影助手
三宅義行
加藤和郎
■ 進行
鈴木寿二郎

■ 出演
戸田春子
他